

見えないギターで 弾く爆笑の調べ

大地洋輔 (エアギター)

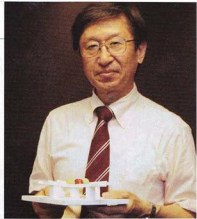
Yosuke OCHI



右腕をぐるぐる回し、飛び跳ねるたびに虎のセーターからメタボ腹がぶりんとぞくぞく。だが、大地の演奏は観客との一体感があってこそ。本職は補(40)のトレッドマークだ。大地は持ち時間1分のうち最初の30秒、エアギターに一切触れない。その場にはいないドラムやベースに指示を出したり観客をおおったり。会場が温まった

ところでやつとギターを入れる。ほかの出場者は最初から全開で、すぐに自分の世界に没頭する。だが、大地の演奏は観客との一体感があってこそ。本職は補(40)のトレッドマークだ。大地は持ち時間1分のうち最初の30秒、エアギターに一切触れない。その場にはいないドラムやベースに指示を出したり観客をおおったり。会場が温まった

中村龍



錯覚の不思議を 数学で解く

杉原厚吉 (不可能立体)

Kokichi SUGIHARA

を深く知ることもつながらず。

世界錯覚コンテスト優勝
遊びのようだが、主催者はれっきとした神経学の国際学会だ。実は人間の目は、この世界は二次元にしか見えていない。それに実行を補っているのは脳の働き。その脳が間違えるときに錯覚は起こる。さまざま錯覚をつくり出すことは、脳の働き

を深く知ることもつながらず。杉原が2010年に優勝したときの作品は、高速道路が十字に交差するような立体模型。ある方向からこの模型を見ると、四方の端から転がした玉が交差点に向かう上り坂を上っていくように見える。だがこれは杉原がつくり出した錯覚。実際には、

道路はちゃんと下り坂だ。専門は数理工学。特にコンピュータによる図形処理の応用に力を入れる。世界でも珍しい「不可能立体」錯覚を起させる立体模型」を作るようになったのは、人間の目は不可能と映るだまし絵の立体の中に、実際作れるものがあるとコンピュータに教えられたからだ。

錯覚はまれな現象ではない。上りと下りが逆に見える道路は世界中にあるという。渋滞やスピード出し過ぎの原因にもなるが、数理解理で錯覚の原因を解明できれば、それを補正する個体のデザインなども導き出せる。

そして錯覚は、単純に面白い。さまざまな錯覚作品を集めた明治大学の研究室兼錯覚美術館は、まさに視覚と脳のびっぴり相だ。

千原真子



吉田孝子 (マツエク施術)

Takako YOSHIDA

まつげを彩るアーティスト

「マツエク」とはまつげエクステーションとは、地まつげ1本1本に人工まつげを装着し、ボリュームを出したり長さを延ばす技術。吉田孝子(33)は2010年にマツエク発祥の地、韓国で行われた世界大会で外国人初回の総合優勝を果たした。

細い毛や短い毛、下向きの毛などバラバラの地まつげに、太さや長さ、カールの形などが異なる

数種類のエクステを使い分け、最終的に横から見たラインが滑らかで、かつ客のイメージどおり「パッチリ」と「たれ目風」に「切れ長」に仕上げ。世界一の吉田の技術は、毎日練習台に向かい、2400本以上のエクステを装着したという努力のたまもの。女性の頼もしい味方だ。

小藤聡子